

近代短歌史試論

——森鷗外を視軸として——

安 森 敏 隆

(一)

新詩社の機関雑誌である「明星」は、明治三十三年（一九〇〇）四月、新聞紙型の十六頁ばかりの小雑誌として刊行された。その「明星」が同年九月の第六号からは豪華で瀟洒な四六倍版の雑誌に生まれ変わり、明治三十年代の文壇を席捲してゆくことになるのである。その第六号の後記にあたる「一筆啓上」には「本社の規則と申すものを社員協議の上左の通り改め申し候」と付して「新詩社清規」なるものを載せている。

一われらは詩美を楽むべき天稟ありと信ず。さればわれくの詩は道楽なり。虚名の為めに詩を作るは、われくの耻

づるところなり。

一われくは古人の詩を愛讀す。されど古人の開拓せる地に、更にわが歟を入れんことは、われらのえ忍びぬところなり。

一われらは互に自我の詩を發揮せんとす。われらの詩は古人の詩を模倣するにあらず、われらの詩なり、否、われら一人一人の発明したる詩なり。

一われらの詩は国詩と称すれども、新しき国詩なり、明治の国詩なり。万葉集古今集等の系統を脱したる国詩なり。

一われらは詩の内容たる趣味に於て、詩の外形たる調諧に於て、ともに自我独創の詩を楽むなり。

一かゝる我儘者の集りて、我儘を通さんとする結合を新詩社と名づけぬ。

一新詩社には社友の交情ありて師弟の關係なし。

一社友は毎月一回その詠草を本社に送る定めなり。本社には社友の一人と謝野鉄幹ありて、可否の意見を附記して、作者の参考に供ふ。之を用ゐると否とは社友の任意なり。

一われらは墮落せる国民の嗜好を高上ならしめんがために、文学美術等の上より新趣味の普及せんとを願ひて、雑誌「明星」を公にす。

一われらは雑誌出版費として毎月金四拾錢を本社に寄送す。

為替は三番町宛。

一詠草（和歌新体詩とも）の歌数には制限なし。

一社友には無代価を以て雑誌を配附す。

一去るものは追はず、来るものは拒まず。

これら十三項目が「明治卅參年九月 東京新詩社」の名前で掲げられている。すでに「東京新詩社」は明治三十二年十一月に発足しさらに九か月前の明治三十二年二月には「アララギ」の礎石となつた「根岸短歌会」が発足し、そしてその一年前の明治三十一年二月には「心の華」が創刊され、これら三つのグループが旧派和歌に対するアンチ・テーゼとして出発したので

ある。

そうした中であつて「明星」は、この第六号の「新詩社清規」によつて、一人一人の「天稟」と「自我の詩」「自我独創の詩」であることを高らかに主張し、さらにはおのれたちの集団を「我儂者の集り」として位置づけ、「社友の交情」を強調し、「去るものは追はず、来るものは拒まず」と一人一人の個性の尊重と才能の重視、さらには自由な集団であることを「明星」の一つの大きな組織原理として、全面に打ち出し鮮明にしていったのである。

が、その「明星」も明治三十年代半ばからの自然主義文学運動の歴史的激流の前に急速にエネルギーを喪失し、終には明治四十一年十一月、百号をもって終刊となるのである。先にもふれたように「新詩社清規」のかなめであつた「新詩社には社友の交情ありて師弟の關係なし」をそのまま実行するかのごとく、明治四十二年一月には「明星」の与謝野鉄幹に變つて「スバル」が石川啄木の発行名義人となつて新たに刊行されてゆくのである。

一方、「明星」が百号で終刊となつた明治四十一年の十月には「根岸短歌会」を母胎にもつ「阿羅々木」（のち「アララギ」

の表記)が創刊されて今日まできている。創刊号はA五版四十二頁の「明星」とは比較にならない小冊子である。その創刊号の「東都来信(二)」で伊藤左千夫は次のように言っている。

御承知の如く子規子の研究理想は、趣味を根柢とし生新にして、不滅的なる創作を得んとするにあるものに候へば内容と形式との關係に就き、片軽片重の偏固に執するか如き愚に陥る所以は決してあるべき善なく候、又擬古にせよ逐新にせよ形似の外観に囚はる、が如き左様なる痴に陥る所以も決して無之候。

乍併要するに空論は無益至極のものに候、現に發展せる吾々後進諸同人の作物其物に就て、直接に精神の存する所を看取せば足れりと存候、吾々諸同人の創作は即子規子の精神と、子規子の理想との現顕に外ならずとの強固な信念に依て奮勵せねばならずと存候、従て諸同人の責任は甚だ重大なるもの有之候訳にて候早々

この文章は正岡子規の七周年忌の「明治四十一年九月十九日」に書かれ、記念すべき「アララギ」の創刊号の後記にあた

るものである。この文章からも明らかなように「アララギ」の組織原理は、精神的・人格的・文学的支柱としての正岡子規を祖として、そしてそれを伊藤左千夫が受け継ぎ、主宰者の權威を組織の中心部に据えつけるところから出発したものであった。さらに会員組織においても「明星」とは異なり、確固たる会員のランクを置き、はかつていったのである。

ちょうどこの「明星」と「アララギ」の二つの相對する組織原理を遠望しながら、一つの架橋で結びつけようとした人に、時の文豪森鷗外がいたのである。

その森鷗外に『うた日記』(春陽堂、明治四十年九月十五日)という明治三十七、八年に奥大将を総司令官とする満州派遣第二軍の軍医部長として従軍した折の、戦闘のあいまをぬって詠みつづつた定型詩をまとめた一卷がある。そこには五七律や七五律や七七律等のさまざまの詩形を駆使した新体詩や長歌、旋頭歌、短歌、俳句という定型詩がところせましと盛りこまれている。

なかでも短歌三百三十一首は、従前の和歌的発想とこれからの短歌的発想がちりぢりに盛りこまれたものとして注目される。そこには長歌体の後につけられた反歌から、万葉集をもとにお

いた本歌取り、戦争讃め、天皇讃めといった儀式歌があり、その一方にまことに私的な日常歌や写生歌が混在している。

さらばさらば宇品しま山なれをまた相見んときはいつにあらべき

大君の任のまにまにくすりばこもたぬ薬師となりてわれ行く

わが舟の八幡はよき名外国のむかしおそれしやはたはよき名

これには「明治三十七年四月二十一日於宇品」と前書きがある。広島宇品の発って戦争に行くときの歌であるが、ここには〈私〉という個の発想というよりも五七五七七の韻律をかりながら〈公〉の発想の中で歌をつむいでいる鷗外がいる。と思えば、次にあげるように〈私〉の個から発想したまことに日常的な歌が一方にある。

あらぬまにものいふまでになりし子をつひにし見ずば哀しかりなん

何となきおもひで苦しあまりにもおとなしき子といひおこせつる
病院に入りしときも常いつく難もろ手に抱きたりけん

これには「明治三十八年七月三十日古城堡にて茉莉の病めるを聞く」とある。

これら二つの発想の落差を落差ともおもわず一つの集の中に入れた鷗外の発想の主体は、森鷗外一人にとどまらず、明治三十年代から四十年代にかけての和歌的発想から短歌的発想への移行期間においてみられる歌人の発想主体の在りようの一端をみせているようにも思われるが、それは別稿にゆずる。

(一)

斎藤茂吉は、歌人としての森鷗外を論じ、総体としては次のように述べている。

おもふに、森鷗外は歌人としての業績には貧しい方だと謂つていい。ただ鷗外が散文の方面に常に新しい事を注入したごとくに、和歌の方面にあつても、いろいろの役割を演じた

のであつた。

〔明治大正短歌史概観〕

茂吉は一体に鷗外の小説を愛読し、鷗外の用いる用語や文章に深く傾倒していた。その鷗外の死を知つたのは、ヨーロッパ留学中の大正十一年の八月四日から九月一日にかけてドイツ各地を旅行していた途次のベルリンであつた。そして、この「明治大正短歌史概観」を書いた昭和四年は、すでにヨーロッパから帰り、かつて書いておいた『短歌写生の説』を刊行したり、朝日新聞社のコメット機に乗り、土岐善麿や前田夕暮らと空中吟を競詠して「アララギ」の主張を他の結社の人々に伍してアピールしなければならぬ立場にもあつた。「明治大正短歌史概観」はそういう時期に書かれ、その中で茂吉は全体を七期に分け、その第五期（明治三十六年始頃——明治四十二年）に、「明星」を中心に「スバル」の初期、佐佐木信綱の竹相会や根岸短歌会、そして尾上柴舟、服部躬治、金子薫園、旧派歌人たちと並べて森鷗外を登場させているのである。その中で歌人としての鷗外の評価は「貧しい方だ」と裁断し、しかし「いろいろの役割を演じた」と一方においては評価したのである。

鷗外先生は歌の方ではじめは新派和歌にはあまり興味が無かつたやうにおもへる。併し鉄幹の東西南北に序詩を作られたり、信綱のおもひ草の序文を書かれたりしてゐるから、まんざら無関心といふわけではないが、先づ大体新派らしい歌は作つて居られない。（森鷗外と伊藤左千夫）

と旧派和歌の系譜の一人として最初期の鷗外を位置づけているのである。その鷗外に新しい断面をみい出すのは先にもふれた明治三十七、八年に満州派遣第二軍の軍医部長として従軍した折に日記がわりに詠みつづつた『うた日記』中に出てくる歌あたりからである。

ところが日露の役に出征せられてゐたころ、ときたま歌を作られたが、これはどちらかといへば新派和歌で、従来の和歌とは大にちがつて居る。（同前）

明治三十九年、満州から凱戦した鷗外は山形有朋の意を受け、友人の賀古鶴所と一緒に六月十日、小出祭、大口鯛二、佐佐木信綱の三氏と酒樓常盤で会見し「明治の時代に相当なる歌調を

「研究する」(井上通泰編『常盤会詠草』初篇中「談話」)ための歌会、常盤会をおこす。この会は以降毎月のように歌会をひらき大正十一年二月の山形有朋の死まで百八十五回に及んだ。この会の頂点には山形有朋公爵がおり、その構成員と選者の主たる人が大口鯛二、小出榮、井上通泰におよぶことよって鷗外の最初に企図した新しい詩精神模索としての場は一応おかれ、旧派的なるものをもあわせもちつつ例会をひらき、入選を決め、詠草の批評をおこなうより他ならなくなってきたのである。そこで鷗外はもう一方において、明治四十年三月より観潮楼歌会を自宅においてもつことになる。鷗外自身、この観潮楼歌会について

其頃雑誌あららぎと明星とが参商の如くに相隔たつてあるのを見て、私は二つのものを接近せしめようと思つて、双方を代表すべき作者を観潮楼に請待した。(『砂羅の木』序)

と言っているが、これは大正四年九月のことであり、第一次「明星」は百号で廃刊となり、「アララギ」が歌壇の中心部にのしあがってきたはじめた頃の発言であることに留意せねばなる

まい。

その雑誌馬酔木は、実に薄い映えない雑誌で、また遅刊がちで正規に毎月一日に発行せられることも少なかつたほどである。明治四十年一月のことであつたらうか。若し鷗外先生の日記を検し得る縁が出来たら分かつとおもふが、一日鷗外先生は左千夫先生を呼ばれて歌に関する意見を徴せられ、それから雑誌馬酔木を全部揃へて寄贈せむことを頼まれたのであつた。(『森鷗外と左千夫先生』)

観潮楼歌会を開くにあたって、その二か月前、鷗外が伊藤左千夫を自宅に呼び、色々と歓談したのち根岸短歌会の機関誌「馬酔木」のバックナンバーを求めたことが茂吉のこの文章からわかる。もともと鷗外が旧派の桂園派の系譜の中で和歌の勉強をし、いつでも五七五七七の和歌の形式を駆使できる位相にあったことは先にも少しふれたが、その一方で以降、「明星」主宰の与謝野鉄幹にも親近してゆくのである。「砂羅の木」(大4・9刊)の「序文」でその間の事情について

明星の初期、中期は私は局外に立つてゐた。明治三十七八年の戦に、私が満洲にゐた頃、与謝野君夫婦と手紙の往復をした。彼二人と私との交通は、戦が罷んでからも絶えなかつた。

と言っているように、「明星」の初期と中期あたりはある程度距離をおいてみていたことがわかる。しかし、当時の文壇の中であつて「明星」のかかげる浪漫的思想と鷗外の思想は共鳴しあつて、明治三十七、八年頃より急速に鉄幹、晶子と親交をむすんでいったのである。が、一方の根岸短歌会は観潮楼歌会を開く明治四十年の頃は「明星」に比すべくもない小さな機関誌「馬酔木」を出しているにすぎなかつた。かつて、鷗外の常盤会から観潮楼歌会にいたる意図について国崎望久太郎は次のように言ったことがある。

常盤会から観潮楼歌会にいたる鷗外の意図にかんするかぎり、それはかなり積極的なものであつた。実は、明星系と根岸系とを統一して自然主義文学運動の詩的領域に対する浸透に对决するところに真の意図があり、それが「在来の歌と一

しよになつて、渾然たる新抒情詩の一体を成す時代」として表象されていたのではないか。（鷗外と啄木との交渉）

国崎氏も指摘するように、鷗外の意図の真意は「明星系と根岸系」のドッキングというよりも、自己の文学的、思想的傾向にあわせて当時勃興しつつあつた「自然主義文学運動の詩的領域」へのアンチテーゼとして観潮楼歌会をおこし、鉄幹、晶子の「明星」系はもちろん、「根岸」系の伊藤左千夫をも歓迎したのではないかと思われる。左千夫は正岡子規の弟子といえども、その内面においては浪漫的気風が横溢しており、氏の小説や詩はロマンティシズムの流れの中にあるものであつた。巨視的な立場にあつて文壇がみとおせる当時の鷗外が伊藤左千夫に注目したのは無理からぬことであつた。左千夫を仲介として、根岸系の歌人たちもその後、観潮楼歌会に参加するようになったのである。

左千夫の弟子の斎藤茂吉がはじめて森鷗外に会つたのは明治四十二年一月九日のことであつた。その日のことが、鷗外と啄木の日記に次のように記されている。

九日（土）。陰、寒波甚し。短歌会を催す。斎藤茂吉始て来たり。佐佐木信綱、北原白秋風邪にて来ず。

〔鷗外日記〕

森先生の会だ。四時少しすぎに出かけた。門まで行つて与

謝野氏と一緒、吉井君が一人来ていた。やがて伊藤君、千樫君、初めての斎藤茂吉君、それから平野君、上田敏氏、おくられて太田君——今日パンの会もあつたのだ。

〔啄木日記〕

両者の日記でもあきららかなように、この日の観潮楼歌会に、

斎藤茂吉がはじめて参加したことがわかる。伊藤左千夫はずでに第一回目の歌会から毎回出席していたが、歌会で互選になるとどうしても左千夫側に点数があつまらず、茂吉もその点数を補充するためにひっぱり出された最初の会でもあったのである。

前年の明治四十一年十月には、三井甲之と伊藤左千夫の対立が表面化し「阿羅々木」が千葉県山武郡睦岡村の厥真方を発行所として刊行され、同誌編集の左千夫に従つて茂吉もこちらに移つていたのである。その一月後「明星」は一〇〇号をもつて

終刊となり、「パンの会」が十二月に発足するのである。この年、長谷川天溪の「現実暴露の悲哀」（一月）、田中王堂の「我國に於ける自然主義を論ず」（八月）などの評論があらわれ、自然主義論議の全盛期をむかえていたのである。茂吉は別のところで次のようにも言っている。

この観潮楼歌会の歌は、随分ハイカラの歌で、鷗外先生自身、リルケの詩を顧慮したと云つてゐるのを見ても分かるやうに、一口に云へば、「象徴詩」と看做してよいものの如くである。

〔ゲダンケン・リリック〕

明治四十二年一月の観潮楼歌会の鷗外の一首「希臘の瓶を抜け出でて文机の螺鈿のうへを舞ふ女かな」を念頭において、鷗外の歌の象徴詩的特色を評したものである。また、同じ時期の明治四十二年五月一日発行の雑誌「スバル」に一挙に連載された「我首首」についてもリルケをはじめとする西洋詩の影響が多いことを指摘し、

実作として真の革新を成就したとは云へないかも知れぬが、

一首一首多くの暗指を将来の歌壇に投じたといふことが出来るのである。

(「ゲダンケン・リリック」)

と言ひ、どちらかというと一首一首の歌の評価よりも、鷗外の歌壇に投じた役割の方を高く評価しているのである。

(三)

明治四十三年、尾上柴舟の「短歌滅亡私論」(十月)があらわれるや短歌界にあらゆる論議と風潮がまきおこった。斎藤茂吉はその反論を四十四年から「アララギ」誌上にこころみた。

短歌を客観すれば短歌の形式は抒情詩の形式である。この事は世俗もいうてゐる。只まことにこの境を味ふ歌人は幾たり居るであらう。短歌の形式は詠嘆の形式である。この境を切に味うてゐる余は正にこの事実の発明者である。この結論に達した道程の精神は今省略する。(「短歌小言」アララギ第四巻第五号・明治四十四年五月号)

この茂吉の短歌イコール抒情詩イコール詠嘆の考え方の飛躍

は、茂吉歌論のどこにも説明されないまま省略されている。この考え方を実証し茂吉歌論を真に証そうと思うなら、同時代者として少し先行していた石川啄木の歌論を前提にしなければならぬまい。生前、茂吉と啄木が森鷗外邸で催された観潮楼歌会で一度だけ会っていたことは先にもふれた。そしてその日の啄木の「日記」にただ「初めての斎藤茂吉君」と書かれたのみで以後、茂吉は啄木にとってわすれられた存在であった。しかし、歌人として一世代先行していた啄木から茂吉への影響ということは当然考えられる。茂吉は啄木に常に反発しながら、啄木のひらいてくれた短歌の日常的、生活的発想を彼の中に貪欲にとり入れることによってアララギイズムとしての「写生」論の(「生」)の考え方を大きくふくらませていったのである。

先にもふれたように「明星」によって力をつちかかってきた石川啄木、北原白秋、木下杢太郎などを中心に「スバル」が創刊され、一方では根岸短歌会を母胎にした「アララギ」が発行されて新しい世代の胎頭がみられはじめた。この後、大正五年頃までの間に近代短歌は様々の才能の歌人を輩出させ、文学史上においては最も華やかな時代の一つであるともいえる。すでに明治三十五年一月の「叙景詩」運動の中から若山牧水や前田夕

暮などの新しい世代も輩出してきていたのである。

そういう意味では大正二年は短歌史上、ある意味で画期的な年でもあった。「生活と芸術」(九月)が創刊され、「朱戀」(五月)「スバル」(十二月)がはやくも終刊する。そして、北原白秋の『桐の花』(二月)、尾上柴舟『日記の端より』(二月)、松村英一『春かへる日に』(五月)、土岐哀果編『啄木歌集』(六月)、島木赤彦・中村憲吉『馬鈴薯の花』(七月)、若山牧水『みなかみ』(九月)、尾山篤二郎『さすらひ』(九月)、斎藤茂吉『赤光』(十月)などの歌集があいついで刊行された年でもある。これらの中で、とりわけ斎藤茂吉の『赤光』が、この時代の一つの大きな可能性をひめたものとして注目される。この「大きな可能性」とは、単にアララギという一つの結社の可能性のみでなく、他の結社の歌人である北原白秋や若山牧水や土岐哀果らとの競合、交換、反発によって開花した当時の短歌界のクロス・オーバー現象からもたらされたものであったことである。

斎藤茂吉の『赤光』(大正二年刊)によって「アララギ」

が蘇生することができたのは、たんに「比牟呂」によってい

た島木赤彦などの合流によるものでもない。左千夫によって媒介された新しい立場が先在していた。それによって茂吉は、啄木作品に示されている近代的諸性格を、ほとんどくまなく止揚することができたからであった。その間には白秋・夕暮・牧水・善磨などとの交流や対立があり、そういう影響、被影響をふくめて、啄木の生活歌の想念は「アララギ」に継承されている。(国崎望久太郎「近代短歌史の輪郭」)

国崎氏は、この期の茂吉について、たんに「アララギ」の徒としてのみ位置づけるのではなく、他の系列の歌人たちと共通の「近代的諸性格」を持ち、「生活歌の想念」を受け継ぐものとして、互いに影響し、影響されながら自己形成していった歌人として位置づけているのである。そうした中から、大正二年の『赤光』や『桐の花』の歌集が開花し、それらの歌集が自然主義文学運動との角逐ののち、歴史的必然として出てきたのである。

(四)

大正三年、島木赤彦は長野県の郡視学の職をなげうって上京

した。そして大正六年に、「アララギ」の編集責任者になるに及び、「アララギ」によって当時の歌壇が席捲されてゆくことになるのである。尾山篤二郎はそうした「アララギ」の歌壇における専制主義を次のように言っている。

惟ふに、結社といふものの必要を感じ、その利用法を学んだのであつたが、学んだ結果、恐らく結社の利用法はこれ以上出なからうと思はれる点までやつたのがアララギである。アララギといふよりも島木赤彦がやつたと明瞭に言つてもいい。そしてその遣り方は余程家康に似てゐる。

〔アララギ雑誌〕（アララギ二十五周年記念号）

ここで言う「結社の利用法はこれ以上出なからうと思はれる点までやつた」とは、根岸短歌会が創設頭初より支柱においた伝統的な師弟関係を中核におき、師資相承の関係を正岡子規から伊藤左千夫へ、そしてその後、紆余曲折を経ながらも島木赤彦が継承し一人の宗匠として頂点にすわるることによって結社に所属する一人一人をみごとに統率したことを意味する。

斎藤茂吉も大正八年頃の「アララギ」について、歌壇の中で

一つの安定期にはいったことを次のように述べている。

併し総じてアララギ歌風は順調にのびて行き、写生、実相観入の説の実行が力強く行はれて行つてゐる。そしてアララギの歌風が既に歌壇の主潮流を形成し、当時の歌の雑誌を見れば、概ねアララギ調の歌になつてしまつてゐる。そしてこの傾向は何時のまにか歌壇の大家にも移行しつゝあることを鮮明しているのである。

〔アララギ二十五年史〕

島木赤彦はこの期、「アララギ」の統率者として意欲的に「写生」説を提唱し、万葉調の復活をうったえ、さらにその集約としての鍛錬道という人生観的方法を短歌の中枢部にもちこむことによって精緻な自然観照の作品を尊重し、自らも創作してゆく時期であつた。そして歌う対象を自然的自然と私的領域にさらに限定せしめてゆくことによって深化させはしたが、逆に「アララギ」の現実主義の限界を露呈させ、现实生活と社会的分野において十分に適応させることが出来なくなつていった時期でもある。すなわち、大正末期から昭和初期にかけての激動の時期の社会的現実を把握することがもはや出来ないとこ

近代短歌史試論

にまで島木赤彦を頂点におくアララギの鍛錬道は禁欲化され形骸化されていたのである。

昭和をすぐ後にひかえた大正十五年の二月二十七日、午前九時四十五分、享年四十九歳三か月で赤彦はこの世を去った。

(学芸学部教授)